

応援を考える : 人間と感情の動員という視点から : 共同研究 : 応援の人類学 : 政治・スポーツ・フ ァン文化からみた利他性の比較民族誌

著者	丹羽 典生
雑誌名	民博通信
巻	160
ページ	22-23
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00009037

応援を考える ——人間と感情の動員という視点から

文
丹羽典生

共同研究 ● 応援の人類学—政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌（2015—2018年度）

応援における個人と組織

本共同研究では、応援という現象をひろく通文化的に検討することを目的としてきた。応援とは、実体的な支援を行うこともあれば、声援を送るだけのこともある。応援の裏面として、敵対集団を妨害したり、野次を投げかけるという行為もかかわってくる。行為する人に焦点を当てると、応援現象は、個人か組織かで分けて考えることができよう。個人によるものが、特定の場で特定の集団に対して一時的（場合によっては一瞬で）に行われる応援で、応援パフォーマンスの型やそれを挟むタイミングも行う人の思いつきや裁量でなされるとさしあたり想定できよう。組織での応援は、その部分集合として、相対的に継続的であり、応援パフォーマンスの型をもち、集行的に行われる形式ということになる。

注意したいのは、ここでいう組織での応援とは、いわゆる日本の学校やスタジアムでみられる実体的な団体だけを指しているのではないことである。もちろん個人と組織の差異は、理念的なものであり、応援という行為にかかわるふたつの極として想定できる。実際に存在する応援のありようは、両者の中間に位置づけられよう。

筆者は前者を一次的応援、後者を二次的応援としてさしあたり整理したいと考えている。そしてそれぞれの応援の表出形態に、文化やジェンダー差がどのようにかかわってくるのかを検討していくというアプローチを念頭において共同研究を進めてきた。共同研究では具体的文脈として、スポーツ、政治、ファン文化に着目してきた。本稿では、これまでの報告を紹介しながら、これまでどのような議論がなされてきたのか見ていきたい。

スポーツの場からみる

このように整理したとき、二次的応援が目につく国として、応援団（ここでは私設であるが学校組織に設置されたものか、といった種類の違いは問わない）が精緻に儀礼化している日本と、チアリーダーの活発なアメリカの例がすぐ頭に浮かぶ。組織化の程度や国ごとの状況にちがいがあがるもののサッカーのサポーターという例もあげられよう。一方でそうしたわかりやすい例以外の国やマイナースポーツの文脈でどのような応援があるのかというのが気になるところである。

たとえば梅屋潔（神戸大学）は、アフリカのサッカーにおいてファンや観客が応援する際に、相手チームに呪いをかけるといった戦略を「アフリカン・サッカーの応援」という発表で分析した。アフリカ研究者の間では比較的知られた現象であるとのことだが、相手チームへの否定的な言辞をあからさまに口外していわば足を引っ張るアフリカの応援は、味方チームを励まし、ともに試合を盛り上げることに力点がある日本のサッカーの応援と対照的であるという。こうした彼我の違いを、アフリカの呪術研究で発展してきた災因論・福因論という枠組を用いて解き明かした。

また立川陽仁（三重大学）は、「アイスホッケーのファイティン



アフリカの呪術師（2015年、ウガンダ、梅屋潔撮影）。

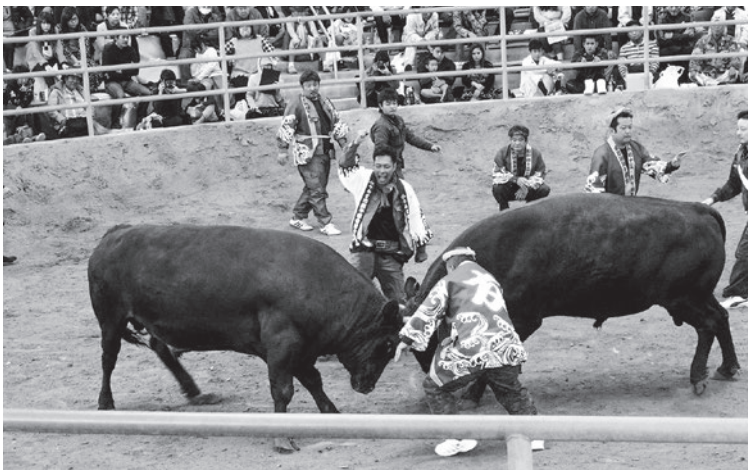
グは応援か」という発表で、カナダのアイスホッケーのなかでも試合が殴り合いに転調するファイティングという行為に注目する。もともとはどこのチームでも、エンフォーサーとも呼ばれるファイティングの任務に特化したメンバーがいた。彼はチーム内でほかの花形選手を応援するという位置づけにあったが、時代の変化の中で、徐々に試合の進行により直接的にかかわる普通の選手となっていく傾向があることが分析された。ある意味興行的な側面がそがれ、スポーツとしての勝敗に徹するスタイルに洗練されつつあるといえようか。共同研究会の場では、ヨーロッパのアイスホッケーでは比較的ファイティングがみられないということから、北米的な暴力に関する規範との関係や、チーム内という限定されたなかでの役割だけではなくひろく客席の観客の応援との関係に踏み込んだ分析が必要ではとの意見が交わされた。

観客論の系譜と現代のファン文化

これまでの研究において応援に類する現象はどのように扱われてきたのであろうか。スポーツ人類学・社会学の領域では、日本独自の行動様式としてとりあげられることがあった。またこうした形式的行動の系譜としては、儀礼の場における観客の合いの手や悪態などの役割に注目する民俗学における観客論がある。

笹原亮二（国立民族学博物館）は、「芸能と観客の諸相—芸能を観ることと観客になることを巡って」という発表でそうした系譜について整理・分析した。民俗芸能の場では、歌舞伎や能などでは考えられないタイミングで合いの手や拍手が入れることがある。笹原は、そうした現象に対して闘牛の際の掛け声を事例として、いわば応援の基層文化に相当するような所作が、いまだどのように活用されているか分析した。

こうした掛け声などは、その性質からして起源は曖昧にならざるを得ないし、人類文化の中での注目度の低い現象であることをまぬかれない。そうしたなか、応援をひろく芸能研究の文脈にまで位置づけ直すことで、観客の応答に、応援の系譜に連なる行為を析出する興味深い論点を提示している。



闘牛と掛け声(2017年、沖縄県うるま市、笹原亮二撮影)。

同じく、民俗学における観客論を牽引してきた亀井好恵(成城大学)は、「踊り手のパフォーマンスの変容—桐生八木節まつりを例にして」という発表で、八木節における合の手に着目した分析を行った。これまで女子プロレスや女相撲を事例に観客の立場に注目してきた彼女が、八木節をとりあげて、祭りの場における掛け合いを盛り上げるために重要であるという合の手に着目して紹介をした。

共同研究を通じて、こうした民俗学的な儀礼的パフォーマンスと一見まったく別のことであっても、ファン文化にも類似した要素が見出されることに気づかされた。ヤンキー文化に関する著作もある難波功士(関西学院大学)による「パフォーマンスを応援するパフォーマンスの系譜」という発表では、ファン文化における親衛隊という存在を事例にした。親衛隊とは、熱烈なファンのことを指すが、単に応援するだけではなく、アイドルの身辺警護まで行っていたような集団を指している。

親衛隊は、1970年代に生まれ、80年代に流行するが、いまでは過去のものとなっている。彼らの組織的な特徴である厳しい上下関係などは、日本の大学応援団との類似性を強く思い起こさせる。親衛隊の応援パフォーマンスの例を映像でみる限り、その独特の型は、大学応援団に継承されている演舞や民俗芸能の一部に見出される所作に通じるものが非常に多いという印象を筆者は受けた。

そうした表面的な類似性が偶発的なものか、何らかの文化的共通性を背後にそなえているのかをあきらかにするためには、いっそう慎重な分析が必要であろう。それ以外にも、ファンと観客そして応援する人を安易に一括にするのではなく、そこに想定できる主体的没入の相対的な違いにも配慮しなければならないなど、配慮すべき要因は複数ある。しかし応援という現象のひろがりを見るうえでファン文化というものをある程度視野に入れるべきことをあらためて確認させられた。

政治の場から見た応援

ところで、ある集団に帰属し、ほかの集団に賛成したり反対したりするという行為は、言葉の基本的な意味で政治的なものである。筆者は、応援という言葉の使われ方を明治時代の新聞記事(朝日新聞や読売新聞など)で検索したことがあるが、政治的な意味でつかわれている用例が多い。当時のメディアではスポーツなどの娯楽に属することより政治的現象を取り扱うことが多かったということはあるかもしれない。

そうした事実を念頭において、共同研究では具体的な政治の文脈における応援にも注目している。いま日本で違和感なく行われている政治的な場面における応援の行為やその形式は、どこまで自然なものといえるのだろうか。この点について高野宏康(小樽商科大学)は、演説という素材に歴史的視点から検討を加えた。不特定多数の人々に対して、講堂や街路で政治的主張を説く演説という行為は、それが生み出されたときには必ずしも自然なものではなかった。彼の発表は、応援という行為の歴史性の検討に関わるものであるが、今後、たとえば応援演説といった活動領域についてより踏み込んだ分析がなされていくと思われる。

同じことは、ほかの地域の事例からも見て取ることができよう。椿原敦子(龍谷大学)は、アメリカのイラン人コミュニティによるデモ行進を素材に、政治的な集まりの形態と特徴を分析した。アメリカでは、パレードが独特の発達を遂げていることで知られているが、彼女は群衆の政治性でも呼びうる文脈から応援の形態の特徴について分析を試みた。

友敵を軸にした感情の動員

このようにスポーツ、政治、ファン文化のなかからさまざま事例を並列してみると、応援という現象に見受けられる基本的な要素がよりはっきり見えてきた。応援には、主体的関与の度合い、感情的な対象への没入度合いという点に濃淡をもちながら、友敵の軸のなかで人々を動員する側面があるのだ。ある意味で、人間が集団で行動するときの姿の一面を典型的に表出しているといえる。

風間計博(京都大学)が共同研究会の発表で、応援という現象



大日本雄弁会(現講談社)刊行の月刊誌「雄弁」の表紙(1931年6月号)。主に演説速記録を掲載し、当時の雄弁家を志す青年たちに読まれていた(高野宏康提供)。

を共感という要素を軸に敷衍して、他者との直接的な結合にかかわる領域(応援)と、距離感をもちつつ接合する領域(支援)とを区分したことも、そうした点にかかわっている。

共同研究は来年度をもって最終年度となる。代表者としては、この研究会では、現象のもつ面白さを記述するというスタンスを保ちながらも、発表と議論を通じて生まれたアイディアを活かしながら、応援という現象について引き続き迫ってきたい。

にわのりお

国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授。専門は、オセアニアの社会人類学。著書に、『現代オセアニアの(紛争)一脱植民地期以降のフィールドから』(石森大知共編 昭和堂 2013年)、『脱伝統としての開発—フィジー・ラミ運動の歴史人類学』(明石書店 2009年)。